

---

# アリたちの小さな戦い

雷雲

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

アリたちの小さな戦い

### 【Zコード】

Z8749M

### 【作者名】

雷雲

### 【あらすじ】

俺は名もなきアリ。

俺は兵隊アリが憧れであり、夢だった。

だが兵隊アリとして生きるということはそんなに甘くはなかつた。

(前書き)

初短編小説。

俺は今日も食糧を運び続ける。老いぼれのあいつたちと一緒に。  
今日もさんさんと日光が照りつける。巣の中のやつはいいなあ。  
やつと巣の近く。今日の仕事はこれで終わりだ。後は食つて寝るだけだ。

俺は名もなきアリ。他の奴らもみんなそう。

俺達は名前の代わりに番号で呼ばれている。俺の番号は、914。  
俺はずつと昔から働きアリだった。だが、今日は違った。

「おい、914、大臣様がお呼びだ。」

俺は、巣の最深部に向かった。巣の最深部には、子供たちがたくさんいて遊んでいる。

真ん中の部屋に大臣はいた。女王よりも偉いような素振りを見せやがつて。女王のほうがもつと偉いのに。  
「さて、お前には新しい仕事を与えてやる。兵士になつてほしい。  
こいつに言われるのは気に食わなかつたんだが嬉しかつた。  
「これが武器だ。」

武器は木でできた剣だった。下級兵士の装備だ。

「69号室に行け。552が待つている。」

「……はい。」

こいつして、俺は働きアリから兵隊アリになつた。

69号室に俺は向かつた。

俺は兵隊アリが憧れであり、夢だつた。

俺は、兵隊アリがすべて強く、かつこよくなれると思つていた。

だが、兵隊アリとして生きるとこ「！」とはそんなに甘くはなかつた。

「よく来たな！－914！－君はこれから兵隊アリとして働いても  
「うう！」

「はい。」

「声が小さい！－！」

「はい！－！」

「もつと！－！」

「はい！－！」

「よし。」

「……」

「まずは訓練を始める！－全体配置につけ－い！－！」  
俺以外のアリが全員一直線に並んだ。俺はあわてて列の左端に行つた。

「まずは腕立て伏せ100回！－始め－！」

俺は働きアリの時自然に体が鍛えられていたため難なくできた。  
他のアリはかなりきついようだった。

「次はスクワット100回

こうして、腕立て伏せ、スクワット、上体起こし（腹筋を鍛えるア  
レ）が終わつた。

「よし、次は

その時、一匹のアリが走つてきた。

「552！蜘蛛です！蜘蛛が現れました！－！」

「何！－何匹だ！－！」

「3匹です！－しかもかなりでかい！－！」

「おい！－お前ら！－いくぞ！－！」

だがアリたちは怯えて動かなかつた。

俺は怒つた。俺の憧れていた兵隊アリが「こんなものだつたなんて。  
そして俺は言つた。

「なんでみんな怯えてんだよ！－戦うのがこわいのかよ！－！」

すると、一匹の兵隊アリが言つた。

「仕方ないじゃないか！　またたくさんのアリが死ぬんだから！　！」

「う…………」

それは俺にだつてわかつてゐた。そして俺は言つた。

「なら、俺一人で言つてやる！　！」

無謀だとわかつてゐた。でもこのまま隠れていることも嫌だつた。

そして俺は、巣の外へ出た。

巣の外には自分の体の十倍ほどある蜘蛛が3匹いた。蜘蛛の体は黒く、眼は赤く光つていた。

…………そして蜘蛛達が気付いた。

蜘蛛達は雄たけびをあげ俺のところに走つてきた。

俺は右に走つて、木の剣で蜘蛛の横腹を刺した。

蜘蛛は呻き声を上げ、刺した所からは緑色の血が出た。だが蜘蛛は怯まず、俺に体当たりした。俺は吹き飛ばされた。そして石に当たつた。頭から血が出てきた。

目と目の中を血が流れる。

その時、あの兵隊アリたちが巣の穴から出てきた。武器を持つて。そして蜘蛛の所へ向かつた。

俺の所には、あの一匹の兵隊アリが来た。そして言つた。

「また大勢のアリが死ぬのは嫌だけど、仲間を見殺しにするなんかもつと嫌だからね。」

そういうと、蜘蛛の所へ行つた。

「おれも負けちゃいられないな！　！」

そして、アリと蜘蛛の小さな戦いが始まった。

仲間たちが死んでいく。

最後の蜘蛛が死んだ。俺たちは勝つた。

多くのアリは雄たけびを上げ、仲間と共に喜んでいる。

俺はあの兵隊アリを探した。

そして見つけた。血を流しているあの兵隊アリを。

「おい！大丈夫か！！」

「あ、ああ…あの914つて奴か…おまえは大丈夫だつたらしいな…俺はこの通り、死亡寸前だ。」

そして小さく笑つた。

「おれのやつたことは間違いではなかつたよつだな…914。俺はお前に助けられた。おびえていた俺を助けてくれた。」

「……」

「ありがとよ…………」

そして死んでしまった。

俺は泣いた。

巣に戻った後、戦いに勝ったことでパーティーが開かれた。だが、俺はそんな気分ではなかつた。

俺はあいつを墓に埋めた。石を置き、石に「901の墓」と書いた。あいつが901と知ったのは、大臣に聞いたからだ。

ある日、俺は人間に踏みつぶされ、死んだ。俺は今、雲の上の世界にいる。

ここにあいつはいるだろうか……

(後書き)

できれば、評価感想ください。大はしゃぎしますので。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8749m/>

---

アリたちの小さな戦い

2010年10月10日04時39分発行